

社会福祉法人の事例



世帯全体、親子ともに寄り添う支援

～社会福祉法人の強みを活かした支援～

一 社会福祉法人 もくせい会 ケアハウスきんもくせい 理事・施設長 池永 直美さん、生活相談員・CSW 石井 智行さん、総括課長 村山 慶さんにお聞きしました一

一 関わった世帯の状況



Dさん：小学6年生の男児。不登校傾向あり。ゲームの影響で昼夜逆転している。
深夜勤務で不在になりがちな父に代わり弟の世話をしている。
家族：父子家庭。父と弟（小学2年生）。弟も不登校傾向がある。



一 支援のきっかけと支援内容を教えてください

池永さん

子どもたちの登校支援をしているファミリーサポート^(※1)のスタッフが自宅の異変を感じて中に入るところ、家の中はゴミが散乱し足の踏み場もない状況。また、学校でも、久しぶりに子どもたちが登校したところ髪が伸び放題で入浴もしていない様子から、担任が校長に相談。担任が家庭訪問したところ、室内はゴミやものであふれ不衛生な状況であることがわかり、市役所に相談したことがきっかけと聞いています。その後、福祉的支援が必要だろうということで市から「ケアハウスきんもくせい」に相談があり、大阪いわせネットワーク^(※2)の社会貢献事業で対応することになりました。

現状と課題

- ① 衛生管理ができていない
- ② 食事はコンビニ弁当が多く栄養面が心配
- ③ 学習の遅れ
- ④ 生活リズムの乱れ
- ⑤ 愛情表現として物を買い与えてしまう

カンファレンス

- 交野市（子育て支援担当）：父のフォロー（子育てと働き方のアドバイス）
- 交野市教育委員会（青少年育成担当）：学習支援
- 小学校：子どもたちの情緒面のケア
- ファミリーサポート：登校支援やゴミ捨ての声掛け
- ケアハウスきんもくせい：ヘルパー派遣により掃除、洗濯、調理準備、子どもたちの見守り

「ケアハウスきんもくせい」の支援の経過

- CSWが自宅を訪問。父に家の中を清掃することについて同意を得る
- 子どもたちはCSWと「ケアハウスきんもくせい」に行き、入浴、散髪（※3）、手作りの昼食を食べる
- CSWや交野市の職員が家の中を清掃（子どもたちも参加）
社会貢献事業で不用品を廃棄し、必要なもの（新しい布団やカーペット）を届える
- 関係者が集まってカンファレンスを行う。子どもたちが健全にすごせることを長期目標に掲げ、支援方針を立て、役割分担をする
- ヘルパー派遣開始（週2回、掃除、洗濯、調理準備、子どもたちの見守り）
- 子どもたちが登校できるようになる。家の中が清潔に保てるようになる
- 父と面談。笑顔も増え、自分の気持ちを話してくれるようになる

※1 子どもの預かりや保育所への送迎などの援助を希望する人と援助を行いたい人が会員となり、子育てを相互に変えあう仕組み
※2 オール大阪の社会福祉法人が連携・協働して取り組む「地域貢献事業」で、CSWによる総合生活相談や緊急・窮乏した生活困窮状況に対して迅速に現物給付等を行う事業
※3 理容師免許を持っている職員が散髪

一 社会福祉法人の強みを活かした支援について教えてください

池永さん

私たちが運営する福祉施設には、食堂や入浴施設といった設備があるとともにCSWやヘルパーなどの専門職もいます。今回のケースでも私たちの持つ資源や人材などその強みを活かし、多機関多職種で連携して支援にあたりました。当初は社会貢献事業で対応しましたが、交野市から養育訪問支援事業を受託していたので、社会貢献事業終了後も引き続き、ヘルパーを派遣し併走型の支援をしました。

CSW

自宅内の清掃では、生活環境を整えるためゴミ捨ても行いましたが、一時的に行うのではなく、必要なものと不要なものを分別するための箱をつくるなど、子どもたちが大切にしているものを残せるような工夫をしました。また、ヘルパー派遣でも、掃除や料理をヘルパーがすべて行うのではなく、子どもたちと一緒に取り組むことを心がけました。

一 支援にあたって大切にしたいことを教えてください

CSW

きっかけは子どもたちの支援でしたが、世帯全体への支援、特にお父さんへの支援が必要だと感じました。お父さんも今の状態がよいとは思っていないけれど、どうすればよいかわからない状態だったと思います。お父さんがどうしたいのか、ご本人の気持ちを確認しながら支援することを心がけました。子どもたちが喜んでいたり楽しそうにしているところをお父さんに見てもらうことで、お父さんのこわばった心がほぐれていくように感じました。



池永さん

私たちが支援したとしてもうまくいきません。今回のケースでは、校長先生の愛情ある対応があったからこそ、子どもたちへの支援につながったと思います。学校とうまく連携することができたので、登校状況をヘルパーと共有するなどスムーズな支援を行うことができました。学校を含む関係機関が、ケース会議を開催するなどしっかりと連携することで、同じ方向を向いて支援することができると思うのです。

一 関わったことにより父子がどのように変化しましたか？

CSW

大人と関わる機会が増え、褒められることが多くなったことで、子どもたちの自己肯定感が高まったように感じました。また、登校支援や学校の働きかけのおかげで登校できるようになりました。さらに弟は、ヘルパーの力添えや自己肯定感の高まりから、自分の身の回りのことができるようになるなど、自ら動けるようになりました。このことがDさんの負担軽減につながりました。

池永さん

子どもたちの笑顔が見られるようになりました。お父さんも、子どもたちの時間を持つことが大切だと気づき、深夜勤務を減らし一緒に過ごす時間が増えました。その甲斐あって、子どもたちの話の中にお父さんがたくさん登場するようになったんですよ！



一 ご世帯に関わって感じたことを教えてください

池永さん

最近、支援の必要な父子世帯に接することが多くなった気がします。このケースを通して、子どもたちを支援するためには、お父さんへの支援・世帯全体への支援が必要なることを学びました。私たちの支援期間は6ヶ月間でしたが、子どもたちにこのことを覚えてほしい、そして、彼らが大人になった時に、頼ってもよい大人が自分たちの周りにはたくさんいることを思い出してくれたら、本当にうれしいですね。

スクールソーシャルワーカーとコミュニティソーシャルワーカー

コラム4

本書の作成にあたって3名のSSWと2名のCSWからお話を伺うことができました。どちらの職種もヤングケアラー支援の場面では欠かせない人材です。改めて、どのような役割を担う人材がおさらいしてみましょう。

● スクールソーシャルワーカー（SSW）

困りごとを抱えた児童生徒に対し、学校を基盤に、児童生徒の置かれた状況を福祉的観点から整理し、課題解決を図ります。チーム学校の一員として、学校内外を問わず、児童生徒をとりまく環境へ働きかけます。また、関係機関等とのネットワークの活用や、多様な支援方法を用いて児童生徒の最善の利益を守ることをめざしています。先の小中学校の事例のように中学校区に配置されている場合や教育行政に拠点を持つ場合もあります。

● コミュニティソーシャルワーカー（CSW）

制度の狭間や複数の福祉課題を抱える方・世帯の課題をときほぐし、世帯全体への援助を行うとともに、居場所などの地域の社会資源を発見して、支援を必要とする人に結びつけたり、新たなサービスを開発したり、公的制度との関係を調整します。市町村が配置しているCSWのほか、今回の事例のように社会福祉施設が公益的な取組みとして配置している場合もあります。

ヤングケアラーの支援では学校や福祉、地域などが連携して支援にあたる必要があります。SSWとCSWはそのつなぎ役を果たしています。